金井高等学校同窓会報WEB版・第3号

金井

発行・編集／金井高等学校同窓会

教員として
アフリカ・セネガル共和国へ

～矢島由和先生インタビュー～

令和２年４月に外国語（英語）科の新採用教諭として金井高校に赴任、英語科の授業を担当しながら、第 46 期生1年次の副担任、翌年には2年次学級担任を務められた矢島由和先生。

かねてから希望されていた独立行政法人・国際協力機構（Japan International Cooperation Agency）のJICA海外協力隊の隊員募集に合格、現在、開発途上国である西アフリカのセネガル共和国で、小学校教育に尽力されている矢島先生に、インターネットを通じてのインタビューに答えていただきました。

【聞き手：森】

矢島　由和先生プロフィール
令和2（2020）年4月から令和4（2022）年3月まで
金井高校・外国語（英語）科教諭
第 46 期生1年次副担任・2年次学級担任
令和4（2022）年4月から
独立行政法人 国際協力機構。
JICA海外協力隊の 2022 年度3次隊隊員として令和5（2023）年1月からセネガル共和国に派遣中
矢島先生の
Instagram（@ yuwa_afrique_senegal）
https://www.instagram.com/yuwa_afrique_senegal?igsh=MThwbXdhaTJlNDVxMw%3D%3D&utm_source=qr
JICA海外協力隊の「世界日記」の矢島先生のページ：
https://world-diary.jica.go.jp/yajimayuwa/cat3107/post.php

――今回はお忙しい中、同窓会のインタビューに応じていただきありがとうございます。先生が学級担任をされていた第 46 期生のみなさんも卒業して2年目を迎えていますが、そのみなさんが在学中にJICA海外協力隊に挑戦、世界へと旅立った矢島先生の現在についてお伝えできればと思い、このインタビューを企画しました。よろしくお願いします。

矢島. こちらこそ、よろしくお願いします。

――まず、改めてJICA海外協力隊に挑戦しようと思われた動機を教えてください。

矢島. 高校2年生の頃に留学をして以来、いつかは海外で働いてみたいという憧れがありました。その思いは常に心の中にあり、働き始めてからは教員として海外へ行ってみたいと思うようになりました。そんな時、高校時代の同級生がSNSでアフリカでの隊員生活を発信しているのを見て、JICA海外協力隊に興味を持ちました。

――JICA海外協力隊とはどんなものなのか、どうすれば隊員になれるのか、に興味のある同窓生もいるかと思います。簡単にご説明いただければ。

矢島. JICA海外協力隊はODA（Official Development Assistance：政府開発援助）事業の一環で、開発途上国へボランティアとして原則2年派遣されます。教育だけでなく、医療、農業、スポーツなど様々な分野での募集があります。私は教員として活動をしたいと考えていたので「小学校教育」という職種に応募しました。語学力の条件（英語の場合は英検3級もしくは TOEIC スコア 330 点）をクリアした上で応募することができ、健康診断や面接を経て合格し、今に至ります。

――合格された後、実際に派遣されるまでにどんなことがあるのですか、また、派遣先やそこで何をするかなどはどのように決まったのですか。

矢島. まず日本国内で2か月強の間、合宿形式での訓練があります。ここでは語学の勉強はもちろん、健康や安全についてなども学び、協力隊として2年間元気に充実した活動を行えるよう、準備をします。私は大学でフランス語に触れていたことからフランス語圏を希望し、セネガルへの派遣が決まりました。おおまかな活動内容は要望調査票というもので事前に知ることができますが、派遣時に現地のニーズが変わっていることもあるので、具体的なことは現地の様子を見て一緒に活動をする任地の方と話しながら決めていくことになります。

――神奈川県の教員を退職されての派遣は、大きな決断でしたね。

矢島. 世界の情勢によっては海外に出づらくなることを実感する時期だったことに加え、これから女性として妊娠・出産を考えたいということもあり、行くなら今しかないと思いました。JICA海外協力隊のボランティアは現地での生活費が支給されることを事前に理解していたので、金銭面での不安はありませんでした。帰国後のことについて具体的には決めていませんでしたが、どのような仕事に就くとしても開発途上国での経験はプラスになるだろうという確信があったので、迷いはありませんでした。

――初めて訪れるセネガルへの派遣は、現地での生活などに不安があったのではないですか。現地には既に日本人の方はいらっしゃったのですか。

矢島. インターネットで見つけられる情報は首都ダカールのものが多く、ダカールから車で4時間かかる任地の様子が全く想像できず、漠然とした不安はありました。私の任地ケベメールには以前も同じようにJICAの隊員がいたのですが、コロナ禍の影響で約3年間、空白の期間ができてしまっている状態でした。任地に到着したばかりの頃は日本人の存在はとても珍しがられ、人目が気になることもありましたが、今ではすっかりセネガルの生活に溶け込んでいます。ここではセネガルの名前「アミナタ」を名乗っているのですが、町を歩いていると子どもから大人まで色んな人がこの名前で呼んでくれて、「外国人」「アジア人」というくくりではなく、個人として関われている感じが嬉しいです。

村の子供たちと

――セネガル共和国に派遣されたのは 2023 年1月だったそうですが、実際に行ってみてどうでしたか。

矢島. 私の持っていたアフリカの「生活に不便が多いのでは」というステレオタイプなイメージが変わりました。車で2時間ほどの大きな町に出るとスーパーがあり、日用品からアジアの食材まで何でも手に入るので快適に生活できています。停電や断水も時々起こりますが、慣れてしまえばさほど困ることはありません。

――派遣されて2年近くになるかと思いますが、現在はどのように過ごされているのですか。エピソード等を交えてお話しいただければ。

矢島. 平日は小学校で活動しています。1年生から6年生のクラスを巡回し先生方の補助をしながら、授業や子どもたちの様子を観察しています。その中で算数の教材を提案することもあります。また、週に2日は音楽の授業に取り組んでいます。その他にもアフリカ布のハギレを使った図工の授業を行った時は、初めての取り組みに先生方も子どもたちも喜んでくれました。週末は現地の友人宅にておしゃべりしたり昼食をいただいたりしながら、セネガルの文化にどっぷり漬かって過ごしています。

鍵盤ハーモニカの授業

——「音楽の授業」とのことですが、どんな音楽を扱うのですか。また、どんな楽器がありますか。

矢島. セネガルの先生方はフランス語や現地語であるウォロフ語の歌を指導されています。国歌を歌うことも多いです。私は、前任の方が日本から取り寄せた鍵盤ハーモニカを活用し、セネガルではなかなか扱わないドレミの音階を教えています。

——現地のご友人とはどのような方ですか、またどのようにして友人になられたのですか。

矢島. 任地ケベメールには「ケベサック」と呼ばれるアフリカンプリントの布を使ったお土産屋さんのアトリエがあり、代表のハディさんやその家族の皆さんと特に仲良くさせてもらっています。2006 年頃、ケベメールで活動していた隊員がケベサックの立ち上げに携わったことから、代々の隊員がお世話になってきました。他にも、市場で知り合った人の住む村を訪れて一日過ごすという週末もあります。

豆のさやむきを手伝っているところ

——これまでセネガルの小学校で活動してこられて、現地での課題は何だと思われますか。

矢島. 家庭では現地語を話していて、小学校に入学して初めてフランス語を学ぶという児童がセネガルでは少なくありません。そういったハードルがある中で学ぶには、具体物（例えば、図形を学ぶならその形をした箱など）があった方が子どもにとって学びやすくなりますが、こういった教材の工夫は少ないです。またいわゆる座学の時間が長く、音楽・体育・図工などの情操教育の時間があまり確保されていないことも課題だと思っています。

2年生の算数の授業

——セネガルにはいつごろまで滞在されるのですか。また、帰国後はどのように過ごしたいですか。

矢島. 協力隊は2年間という期間の限られたボランティアとしての活動であり、とても名残惜しいですがもうすぐ任期を終え、2025 年1月に日本へ帰国します。協力隊の仲間の中には、開発途上国での経験を活かして国際協力の仕事に就く人も多いですが、私は日本で家族との時間を過ごしながら少しのんびりしつつ、セネガルで見たことや感じたことを多くの人に伝えられたらと考えています。任期中にフランス語の資格を取得したので、いつかまたフランス語圏でのお仕事に挑戦してみるのもいいなと思っています。

——金井高校勤務時代の思い出等ありましたら。

矢島. 2年3組の学級担任をしていた時、体育祭ではクラスTシャツの背中にひとりひとり違う言葉を入れていたのですが、私のTシャツに入れる言葉を、取りまとめをしてくれていた生徒に任せたところ「祝初担任」とい

う言葉が入っていて、少し照れくさく、でもとても嬉しかったことが、印象に残っています。セネガルでも、これを着るたびに金井高校の教え子の皆さんのことを思い出しています。また、学年最後の日にはサプライズで動画を用意していてくれて、このクラスで担任をさせてもらえて本当に良かったなと胸がいっぱいになりました。

――最後に、金井高校の卒業生の皆さん、特に先生の教え子のみなさんへメッセージをお願いします。

矢島. 以前は全く興味のなかったアフリカですが、縁あって今こうしてセネガルで貴重な経験をさせていただき、今は自分の一番の関心事になっています。何が人生を変えるかは分からないものだなと思います。みなさんも、何かチャンスが訪れた時には変化を恐れず、ぜひ勇気をもって一歩踏み出してほしいと思います。

――今回は貴重なお時間をありがとうございました。お体に気を付けて、あと数カ月となった、子どもたちをはじめとするセネガル・ケベメールの皆さんとの日々を大切にお過ごしください。

　矢島先生には何回にもわたるメールのやり取りに加え、スナップ写真をたくさんご提供いただいたことで、現地の状況や、先生ご自身が充実した日々を過ごしていらっしゃる様子がよくわかるインタビュー記事にすることができました。あらためてご協力に感謝いたします。また、そんなやりとりの中で、嬉しいご報告もいただき、元同僚の森としても、このタイミングでの取材をさせていただいて、大変良かったと感じています。
　矢島先生は、この記事のプロフィール欄でリンクをご紹介させていただいているインスタグラムやサイトで、さらにたくさんの情報を発信していらっしゃいます。JICA海外協力隊に興味・関心をお持ちの方、また、矢島先生をご存じの同窓生・旧職員の方は、是非そちらの方もご覧ください。